

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
センター長	増田 大作
副センター長	花田 浩之

—概要—

当センターは従来の診療科ごとの役割とは違う観点から研究マインドをもって、りんくうおよびこの泉州地域の特色を活かした事業を多彩に進めたいと考えている。その3つの柱として、①Wellnessウェルネス、②Careケア、③Activityアクティビティを規定し、そのそれぞれについて活動する。

① 「生涯リスクを知り健康を維持するウェルネス」

健康でかつ安心な状態であるウェルネスを続けることは健康寿命を延伸し充実した人生につながる。健康診断の受診は現在の健康の状態は評価できるが将来予測は難しい。これが可能になるとよりウェルネスを向上させられるはずである。健康管理センターにおける健康診断結果の生涯リスク予測を可能とし、受診者の増加・受診率の向上・未病状態の発見や改善につながる一般外来への連携を進め、現在この地域の方々さらにはこの国のウェルネスをさらに深めたいと考えている。

② 「多職種かつ施設間で連携して疾患と闘うケア」

本地域の地域連携において、スムーズな情報提供がなされていない状況であり、また当院の中でも医師だけではなく事務職やメディカルスタッフ(看護師・栄養士・臨床検査技師・保健師・放射線技師・介護施設者など)の連携は十分ではなく工夫が必要である。これらの「連携」をすすめるため、負担を増やさずにスムーズにする手法について検討を行い、地域における医療の効率化を考える。

③ 「地域の活性化や医療者のアクティビティ」

医療の業界のみならず長時間労働や負担の多い仕事が本来の仕事の妨げ、医療者が活躍できる状態から離れる事態に陥りやすくなっており、業務改善が強く求められる。また、地域の人口減や営業力の低下など過疎化が進行している。医療者を中心に地域が活性化すればもっとアクティビティ=活力は向上すると予想される。「ウェルネス・ケア」を中心とした地域健康管理や健康事業を増進していくため様々な提言や介入を進めていきたいと考えている。

「ウェルネス」「ケア」「アクティビティ」をキーワードに、得られた結果をアウトプットし、「りんくうウェルネスケア」をブランディングしこの地域の「特色」として我が国のモデルとなるよう進めたいと考えている。

—実績—

以下、①②③それぞれについての実績を列記する。

① 「生涯リスクを知り健康を維持するウェルネス」

先年度当院健康管理センターにおける新規健診システムの導入を果たし、検診受診が大幅に増加し受診患者数の増加に貢献していたところであるが、COVID-19の感染拡大に伴いインバウンドの消滅および検診受診数の激減がおこった。しかし感染予防の配慮を施設内で十分検討し、人間ドック受診数は極力維持するよう対応した。また近隣地域での健康フェスタや市民公開講座も軒並み消滅し十分なアナウンスメントを行うことが難しかったが、家族性高コレステロール血症(FH)についての地域連携ネットワークは維持し、自治体での健康診断における高LDLコレステロールスクリーニング、地域プライマリケア医からの紹介は継続して行われ、地域への周知の努力が身を結びさらにこれらの患者の中から循環器内科への患者獲得にもつながった。また、継続して睡眠時無呼吸スクリーニングから循環器内科における睡眠時無呼吸専門外来への患者連携を行い多くの症例がCPAP治療を受けるようになり、安定した業務の継続に資する結果となっている。

また、脂質異常を中心とした様々な臨床研究を継続して実施しており、その成果を国際的な査読のある雑誌に投稿し受理されている。First Authorとしての論文も年2報を継続しており、co-authorとしての論文も多く採択されている。また同様の内容を国内の商業誌にも掲載している。さらに学会でのこの地域の取り組みの紹介や研究内容の発表、医師向けの講演会も多く開催しており、当センターの対外的な評価を上げる努力を継続している。

② 「多職種かつ施設間で連携して疾患と闘うケア」

医師における事務作業のタスクフティングのため医師事務秘書(DS)が活用されている。今年度はさらにDSリーダー職の強化のため主任・副主任の3人を決定しさらに迅速に問題を解決できるよう形成した。これらの医療ライセンスを有しない事務作業者の感染対策も十分に行い、換気や作業環境確保の徹底、健康管理やフェイスガードなどの用具の確保、ワクチン摂取の実施など多くの対応を行なった。

③ 「地域の活性化や医療者のアクティビティ」

泉佐野保健所の管轄する周辺自治体と協調を続け、特定健康診断における脂質異常を当院循環器科高脂血症専門外来に紹介、適切な診断及び治療ののち逆紹介する

ルートを継続している。COVID-19感染症の蔓延により医療者のアクティビティに寄与する活動はなかなか難しいところにはあるが、ポストコロナに向けて新たな事業提案ができるよう検討を続けている。

2020年度 センター業績数

業績内容	件数
国際誌英文原著・総説(査読あり)	19件
国際誌英文原著・総説(査読なし)	0件
国際学会発表	0件
国内学会発表・座長	12件(+1件)
和文原著、総説、著書	12件
研究会・講演会	6件
学術講演(医師会講演会等)	5件
院内講演会	0件

—今年度の成果と反省点—

健康管理センターでの業績はコロナの影響もあり明らかな低下に見舞われているが、ポストコロナに向けて力を蓄える時と考え、受診者数の増加・二次検診の増加のためのスムーズな連携システムを構築する。FHや睡眠時無呼吸については自治体健康診断や近隣クリニックからの紹介が確実にっており、当院が脂質異常・高脂血症における本エリアの中心的存在になったといえる。今後もさらに本地域さらには大阪府下へとこの運動を広げることで、当院だけではなくこの南大阪地域から管理されていないFHを一掃したいと考えている。他職種連携に関してはさらにDS業務の連携、他業態の連携をすすめることにより円滑な業務と労働時間の短縮につとめていきたいと考えている。地域連携に関してはまだ始まったばかりであるが、とくに近隣クリニックからの需要に関して十分対応できるようにさらに工夫していきたい。

—来年度への抱負—

開設3年目となり、当院独自での研究発表や地域との連携も多く対応し、さらにCOVID-19感染についても対応した。しかしまだまだ当院独自の研究内容のアウトプットに関してはまだ十分ではないと言える。健診システム、DS業務、予防医療の浸透に加え、当院独自の臨床研究や治験の推進も合わせて努力していきたいと思う。